

「コルヴィナ文庫」から聖イシュトヴァーンへ — ハンガリーの歴史を遡る旅 —

秋山 学

筆者は2005年8月より約半年間の在外研究を拝命し、現在ハンガリーに滞在している。『つくばね』執筆の依頼を受け、ハンガリーの図書館を通して同国の歴史を展望する旅に出ようと思う。まず写真①をご覧頂こう。ブダ城の王宮F地区を占め、堂々たる威容を誇る国立セイチェーニ図書館である。同図書館がその名を冠するセイチェーニ・フェレンツ伯(1754-1820)は、現ハンガリーの通貨のうち5000フォリント紙幣にもなっているセイチェーニ・イシュトヴァーン伯(1791-1860)の父親に当たり、この図書館およびペシュト側にある国立博物館の創設者として名を遺す。ブダ城F地区の8階分を占める同図書館の入り口は、城郭南端の「獅子の中庭」に面し、ちょうど図書館内の5階部分に相当する。



写真① 国立セイチェーニ図書館

18世紀の末、セイチェーニ伯は「ハンガリー的なもの」の総体を収集することを自らの目標として定めた。それは、ハンガリーが一貫してヨーロッパ的な知的共同体の有機的一員であることを立証するためであった。彼は自らのコレクション、すなわち13000冊の印刷本、1200点の手写本、数百点の地図等を国家に寄贈する。こうして「国立セイチェーニ図書館憲章」が1802年11月25日に起草され、翌日王から認可が下りた。図書館は当初ペシュト地区にあり、一般への開館は1803年12月10日に行われている。国立図書館の創設は当然、当時盛り上がりつつあった国民主義に大きな刺激を与えた。同時に、図書のみならず考古学的・歴史的遺産・芸術等をも収集しようという国立博物館設置の原動力ともなり、そのための法令は1808年に定められた。1846年、図書館は博物館内に新しく開設された建物に移され、さらに1985年、現在のブダ城内の王宮地区に移転する。

現在この国立図書館が総力を挙げて取り組んでいるのが、15世紀の後半、ハンガリー最盛期のマーチャーシュ・コルヴィヌス王(1443-90; 在位1458/63~没年; 第34代国王)による蔵書、すなわち「コルヴィナ文庫」の再構築事業である。同文庫は、往時には1500から2000冊に及ぶ古典関係の貴重書を所蔵し「ヴァティカンに次ぐ」とも称された絢爛たる蔵書コレクションである。現在、欧米の図書館には残存する232点の所在



が確認され、現ハンガリー国内では54点、そのうち36点がこの国立セイチェーニ図書館に収められている(詳しくは本学文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究文藝篇』第47号1-21頁所収の拙稿を参照)。このマーチャーシュ王は、在位中「義王」として誉れも高かった名君であり、ユーロ導入までのハンガリー通貨1000フォリント紙幣にもなっている。「コルヴィナ文庫」のための基盤は、王が幼少の頃より受けたラテン語など人文主義的な文



写真② エステルゴム大聖堂

化教育であった。もっともこの図書館蔵書は、王の死後、南から攻勢を強めたトルコ軍が1526年モハーチの戦いの余勢を

買って北進しブダを攻略した際、その多くがドナウ川に散った。

さて、現在のブダの地に最初に王宮を建てたのは第19代国王ベーラIV世(1206/35-70)である。彼は1241年タタール人の襲来に遭い、北方のエステルゴムからブダに王宮を移すことを企図した。続いて14世紀には第26代国王ナジ・ラヨシュ(1326/42-82)によってブダ城の増改築が行われ、15世紀にはマーチャーシュ王がここに人文主義の栄華を花開かせることになる。一方、初期に王都であったエステルゴムは、現ハンガリー領内では北のスロヴァキアとの国境、やはりドナウ河畔に位置する。当地は現在に至るまでハンガリー・カトリック教会の総本山であり、大聖堂(写真②)はまさしく圧巻である。同聖堂の建立は1821年から1869年にかけて行われており、これは上記セイチャーニイ図書館と同じく、ハンガリー史のなかで「改革期」(1825-1848)と呼ばれる近代化の時期に当たる。大聖堂の前身は11世紀、初代国王聖イシュトヴァーン(967-1038)が建てた聖堂に遡り、その当時は王城もエステルゴムにあった。このエステルゴム大聖堂は、イシュトヴァーンの像とともに現10000フォリント紙幣にも印刷され、初代国王と当地との密接な関係を想起させる。ちなみに上記「コルヴィナ文庫」の蔵書は、ハンガリー国内では国立図書館のほかに、学士院やエトヴェシュ・ローラント大学の図書館、それにジュールの司教座図書館にもその所在が確認されているが、エステルゴムの大司教座図書館も同文庫の1つを所蔵する(Inc.I,1;Raynerus de Pisis, Pantheologia)。

ハンガリーの図書館史を語る際、西部のジュール近郊にあるパンノンハルマ修道院も重要な位置を占める。同地を訪れる者は、写真③に見るように、修道院内部をアーケード状に取り囲むマーチャーシュ王時代の回廊と、古典様式による図書室を参観することになる。図書室は修道士、教師、研究者、学生たちによって

利用され、総蔵書数は365000冊にのぼり、さらに年間2000-3000冊ずつ増加しているという。蔵書は主として神学関係のものであるが、ハンガリーとヨーロッパの歴史・文学関係のものも含まれる。稀覯本としては、13世紀から17世紀にかけての手写本20点、200点におよぶincunabula(1500年以前の印刷本)を所蔵し、最古の蔵書は13世紀に遡るラテン語聖書である。世界遺産にも指定されている同修道院は、ベネディクト会に属し、後期ロマネスク/初期ゴシック様式の大聖堂を擁する。同聖堂は中世ハンガリー建築に属する傑作の一つでもある。この修道院の起源は、聖イシュトヴァーン王の父ゲーザ公が、996年チェコからやって来た修道士たちをパンノニアの聖なる山に住ませたことに発する。1001年にはイシュトヴァーンにより法的にも同修道院の特別な地位が認可され、存立の基礎が固められた。現在なお、ここには約60名のベネディクト会修道士が聖師父の戒律に従って共同生活を営み、Ora et labora(「祈り、働け」)の精神を伝えている。



写真③ パンノンハルマ修道院

同聖堂は中世ハンガリー建築に属する傑作の一つでもある。この修道院の起源は、聖イシュトヴァーン王の父ゲーザ公が、996年チェコからやって来た修道士たちをパンノニアの聖なる山に住ませたことに発する。1001年にはイシュトヴァーンにより法的にも同修道院の特別な地位が認可され、存立の基礎が固められた。現在なお、ここには約60名のベネディクト会修道士が聖師父の戒律に従って共同生活を営み、Ora et labora(「祈り、働け」)の精神を伝えている。

「コルヴィナ文庫」をひもとき、ハンガリーの図書館史を遡るうちに、初代国王聖イシュトヴァーンの姿が次第に前景に現れてきた。おりしも毎年8月



20日には、ハンガリー全土で国を挙げて「聖イシュトヴァーンの祝日」が祝われる。彼の生涯を迎るとき、彼やマーチャーシュ王を含め、歴代の王が戴冠されまた埋葬された地として、セーケシュフェーヴァールも無視することはできない。ブダペシュトの西南、特急でちょうど1時間の地に位置するこの町は、中世のころから「アルバ・レギア」(白い王城)の名で知ら



写真④ セーケシュフェヘルヴァール遺跡公園

発掘が継続されている(写真④)。トルコがこの地を陥落させる1543年までの間、戴冠を受けたハンガリー国王は総計37名にのぼるが、この(旧)「慈愛の聖マリア大聖堂」には、聖イシュトヴァーンをはじめ、アールパード朝歴代の王たちの墓所があった。以下順に、文人王カールマーン(-1116)、ベーラⅡ世(-1141)、ゲーザⅡ世(-1162)、ラースローⅡ世(-1163)、イシュトヴァーンⅣ世(-1165)、ベーラⅢ世(-1196)、ラースローⅢ世(-1205)と並ぶ。14世紀になると現200フォリント紙幣にもなっているカーロイ・ローベルト(-1342)、ナジ・ラヨシュ(-1382)、次いでアルベルト(-1439)、そしてマーチャーシュ王(-1490)、16世紀前半のウラスローⅡ世(-1516)、上記モハーチの戦いで散った若き王ラヨシュⅡ世(-1526)、それにサポヤイ・ヤーノシュ(-1540)まで、総計15人の王がここに埋葬されたとされる。

れ、ハンガリー国内でも有数の歴史を誇る町の一つに数えられる。往時の大聖堂はトルコの襲撃を受けて瓦解したが、現在は「遺跡公園」として整備・開放され、



写真⑤

ブダペシュト聖イシュトヴァーン大聖堂

896年に建国(honfoglalás)を果たしたハンガリーでは、19世紀の末に建国1000年祭を祝うべく諸方面で準備が進められた。ドナウ川の東岸、ペシュトにある聖イシュトヴァーン大聖堂(写真⑤)の建造事業もその一つである。この大聖堂の建立に際しては、1810年代に基礎事業が始められたが、工事はようやく1851年8月14日、ペシュトの有権市民で建築家のヒルド・ヨーゼフのプランにしたがって着手された。彼は上記エステルゴム大聖堂の設計者でもある。彼の死後総監督責任者が相次いで交代し、結局献堂式は1905年9月19日、アールパード家の聖エルジェーベトの記念日に行われた。この聖堂内の主祭壇をぐるりと取り囲むように、聖イシュトヴァーンによる5つの主要事跡が青銅レリーフによって掲げられているが(マイエル・エデの作)、そこには上記パンノンハルマ修道院の建立も含まれている。

19世紀の創設になる現ブダ城内の国立セイチェーニイ図書館から出発したわれわれの旅は、その秘宝である15世紀の栄華、マーチャーシュ王の「コルヴィナ文庫」を通して、11世紀聖イシュトヴァーンの時代へと遡ってきた。その間、エステルゴムの大司教座聖堂とパンノンハルマの大修道院を經由し、歴代の王の着座と埋葬の地、セーケシュフェヘルヴァールを経て、ペシュトの聖イシュトヴァーン大聖堂へと及んだ。総じて、図書館が施設としての整備を終え、利用に供されるようになったのはそれほど昔のことではない。だがそこに収められた蔵書の伝播を辿り、伝播の経緯をひも解き、あるいは建築史の上にその図書館を置いてみると、一国の歴史の背景が浮かび上がることも稀ではない。いま、ハンガリーの首都ブダペシュトにあって、ブダ城のセイチェーニイ図書館とペシュトの聖イシュトヴァーン大聖堂とは、かつてコルヴィナ文庫の多くを河底に沈めたドナウをはさみ、静かに対峙している。

(あきやま・まなぶ 人文社会科学研究所助教授)

<<目次へ | 次の記事へ>>

(C)筑波大学附属図書館